

5 奈良・平安時代の「牧」と推定される遺構群について

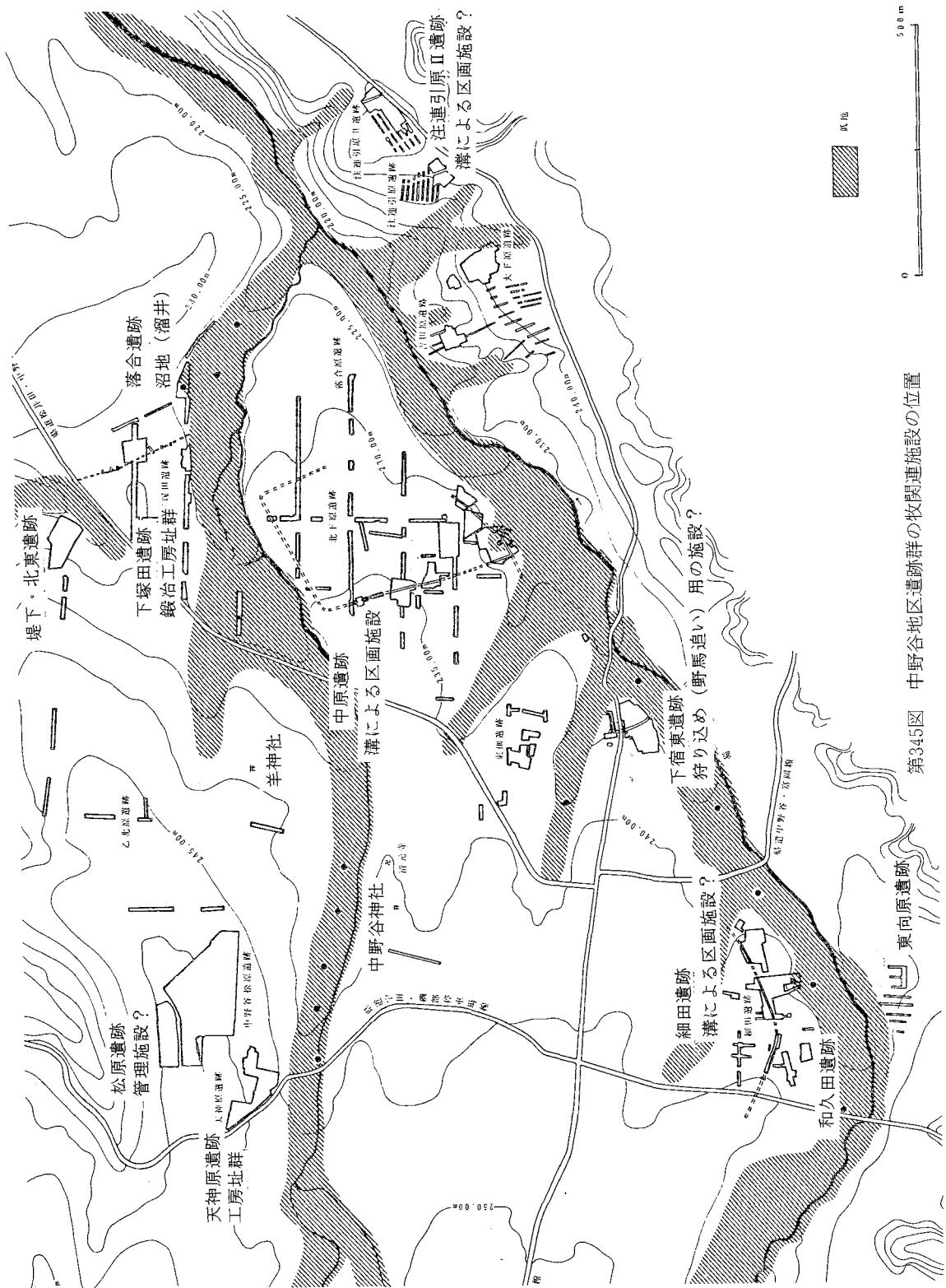
中野谷地区においては、奈良・平安時代の大規模な溝による区画が検出された遺跡は調査の進展とともに増加し、現在では5遺跡（中原遺跡、下塚田遺跡、下宿東遺跡、細田遺跡、注連引原Ⅱ遺跡）が確認されている（第335図）。これにより、区画を伴う区域の面積も100ha以上に及ぶことが明らかとなった。また、それ以外にも大鍛冶と推定される工房群が検出された下塚田遺跡や、畿内系暗文土師器を伴う性格不明工房群が検出された天神原遺跡がある。しかし、一般的な集落遺跡は、ほとんど確認されておらず、この地区の当期の様相は特殊であると言わざるを得ない。こうした状況から本地区の遺構群については「牧」とその関連施設である可能性が高く、すでに第V章において、根拠を述べている。そこで、ここでは「牧」と関連する個々の遺跡の特徴と問題点を抽出し、若干整理しておくことにする。

（1）各遺跡の特徴

中原遺跡 最初に大規模な区画の存在が確認された遺跡である。台地の内部に溝に囲まれた台形の区画が存在しており、推定面積は8.9haである。区画内にはピット群以外の遺構はまったく検出されず、大規模な沼地をも取り込んでいる。西辺には土橋部分の存在が確認されている。溝内からは9世紀前半と推定される土師器・須恵器片が検出されている。なお、沼の東縁部には、12世紀以降の埋葬馬が1頭検出されており、時期は下るものこの遺跡内に馬の存在していたことが確認されている。

下宿東遺跡 舌状台地の先端にクランク状に折れ曲がった溝が存在していることが確認された。ここでは、溝同士が切り合っている状態が確認されており、継続的な利用が推定された。そして、平坦面を単に区画する以外に別の機能を有していたことも推定された。また、溝構築以前（縄文時代前期と古墳時代）の遺物が多量流れ込んでいること状態が確認された。

細田遺跡 舌状台地を縦に裂く形で緩く弧を描く溝の存在が確認された。単に平坦面を確保するための区画ではなく、広域的な囲い込みの可能性が推定された。この遺跡の溝には、柵列と推定されるピット列が構築されており、最外縁部を区画する溝の可能性がある。そして、ここでは埋め戻しにより構築された土橋が存在しており、台地南縁部に存在する湧水点と内部を繋ぐ施設と推定された。また、ここでは6世紀代の住居址が破壊されていることと、隣接する7世紀の住居址が溝構築時の堆土と推定されるローム土により埋め戻されていることが確認され、上限は7世紀代まで遡る可能性があることが確認された。大溝はさらに西へ延びていることが確認されてお



り、旧東横野村7号墳（明神塚）を避けて構築されていることも判明した。

和久田遺跡 細田遺跡と同じ台地上に存在し、溝の南側（外側）に位置する。ここでは、9世紀の住居址2軒が検出されており、小規模な集落の存在が確認された。そして、溝の北側（内側）では本遺跡群では最も新しい9世紀後半の住居址1軒が検出された。これらの住居址は「牧」の管理に関連する人間の居住施設の可能性もあり、留意される遺構である。

注連引原Ⅱ遺跡 こうした一連の溝の存在が確認される以前に調査を行った注連引原Ⅱ遺跡においても、同種の溝が検出されている。この溝からは弥生時代中期初頭の遺物が、覆土中層～下層にかけて多量検出されていたため、この時期の「濠」として報告した（大工原1988）。しかし、下宿東遺跡の事例にもあるように溝構築以前の遺物が流れ込んだ可能性が否定できないことと、一連の溝と形態・覆土の堆積状態が酷似していることから、同種のものである可能性が濃厚である。すでに、弥生時代中期初頭としての位置付けもされているが（柿沼1990等）、こうした溝が中野谷の台地全体に縦横に走っていることから、現状では奈良・平安時代に形成された大規模な施設の一部と考えた方が妥当とみられる。

下塚田遺跡 台地を横切る溝と、4軒の鍛冶工房址が検出されている。工房址はすべて溝の西側に位置している。また、工房址のうち1軒は長屋形の大形建物址であり、当初正方形であったものが、2倍の面積の建物へ拡張されたことが確認された。ここでは羽口・鉄滓などが多数検出されているが、製品は全く検出されておらず、いわゆる「大鍛冶」的色彩の強い工房であったと推定された。この工房址の存続時期は7世紀終末から9世紀にかけてと推定され、「牧」の存続時期と一致する。また、福田豊彦氏は平将門の研究事例から、「牧」の運営と「鉄」の生産が有力豪族により、一元的に管理されていたことを指摘しており（福田1981）、本遺跡の事例との共通性も窺える。

天神原遺跡・松原遺跡 大形建物址を伴う工房址群が検出されている。この工房址群の機能については、はっきりしないが、畿内系土師器が共伴しており、官衙的・技術系的色彩が強い施設と推定される。（註1）また、時期的には8世紀後半と推定され、「牧」の存続時期内に営まれた工房群であることが確認された。なお、隣接する松原遺跡において、小規模な溝（幅50cm程度）による大規模な方形区画の存在が確認されているが、現在整理中であり、時期を特定することができないが、天神原遺跡の工房群と関連するものと推定され、大規模な建物址の周囲の区画の可能性もある。

堤下・北東遺跡 8世紀の住居址が2軒検出されている。この遺跡では6～7世紀代の住居址も7軒検出されている。住居同士の重複はまったく認められないことから、集落は断続的であったと推定される。この遺跡は最も一般的な集落の様相を呈している。

南向原遺跡 猫沢川南岸に位置する。ここでは、小規模な溝による区画が検出されている。この区

画の時期は特定できないが、堆積状況から奈良・平安時代の可能性がある。

その他の遺跡 これ以外に谷地部分には浅間B軽石降下以前の水田址の存在が、テフラ分析とプラント・オパール分析の結果、設定したすべての試掘坑で確認されている。したがって、台地の周囲に存在する谷地には、広範囲に水田が存在していたものと推定される。しかし、水田の開始時期を決定するデータは得られておらず、大溝が構築された時点でも水田が存在していたかどうかは不明である。

(2) 「牧」の可能性の検証

中野谷地区では8世紀から9世紀にかけての時期を中心とした時期に構築された、大規模な溝による区画が多数存在することが確認された。また、溝の形態と規模には斉一性が認められ、最上層に浅間B軽石層が堆積することも共通している。また、下塚田遺跡の大形建物址（H-4）や和久田遺跡の9世紀の住居址（H-1）も検出状況は同じであり、廃絶時期は同じ頃であった可能性が高い。

区画には様々な形態が認められ、各台地単位で完結する施設とは考えられず、中野谷地区の遺構群が一体となって機能する構造であったとみられる。

なお、「牧」については、『大宝律令』のうち『厩牧令』の中で制度面での規定が定められている。しかし、実態と制度との間には多少隔たりが存在していたようであり、福田豊彦氏は古代「牧」の具体的施設について、下総の例を通して述べている（福田1981）。また、山口英男氏も長野県の例などにより、「牧の景観と施設」の具体的様相について言及している（山口1990）。そして、『群馬県史』の中で前沢和之氏も「牧」の具体像について言及している（前沢1991）。

各氏の見解は基本的に同じであり、以下の施設等が「牧」に必要な施設であるとしている。

- ①放牧用の各種区画施設（大溝・土壙・柵）
- ②調教用の馬場
- ③繋飼用の厩舎
- ④狩り込み（野馬追い）用の施設
- ⑤馬具などを生産する各種工房や鍛冶施設
- ⑥飼料貯蔵用の建物・倉庫
- ⑦水場
- ⑧管理用の建物・執務所

また、これに加えて、放牧地としての数百haに及ぶ広大な土地が必要であり、下総の例では、

区画が容易な半島状の地形が立地の要件としてあげられている（福田1987）。

これらの施設群と中野谷地区遺跡群で検出された遺構群を対比してみると、①には下塚田、中原、細田、注連引原Ⅱ遺跡の大溝が該当する。④には下宿東遺跡のクランク状の溝が該当する。また、⑤には下塚田遺跡の鍛冶工房址群と、天神原遺跡の工房址群が該当する。そして、⑦には中原遺跡の沼地が該当する。さらに、⑧には松原遺跡で検出された方形区画が該当する可能性がある。しかし、②・③・⑥に該当する遺構は確認されていない。

また、放牧用の広大な土地については、中野谷地区遺跡群の大溝が検出された台地は100ha以上の面積を有しており、十分な土地が確保されていたことが確認されている。そして、下総に見られる半島状の地形についても、中野谷地区にはこうした地形に類似した、舌状台地が連続しており、立地条件も満たしている。

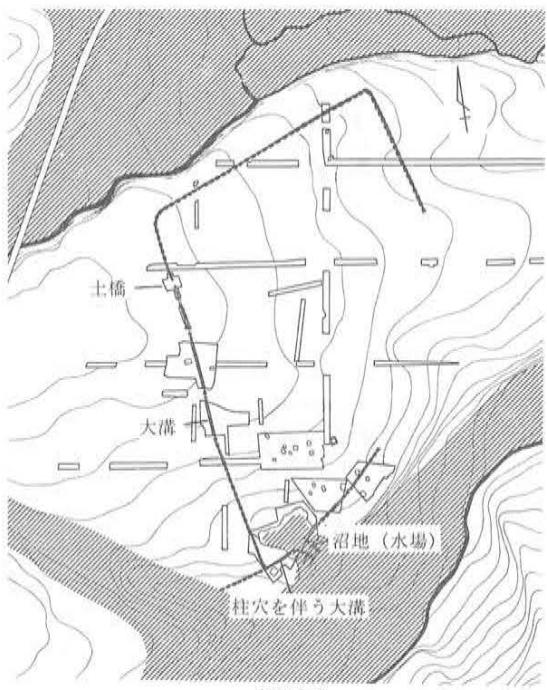
以上のように、一般的な農業集落遺跡では認められない施設が、中野谷地区遺跡群には多数存在しており、「牧」の施設として文献史学の立場から提示されている施設に該当すると考えられるものも多い。そして、半島状の地形の連続体である広大な台地全体に遺構群が存在している。したがって、中野谷地区遺跡群は、「牧」とその関連遺跡群であったと結論付けることができる。遺構群の配置をもとに具体的に「牧」の景観を推定すると第346図のように示すことができる。

なお、浅間B軽石降下直前には台地の周囲の谷地に水田が存在していたことは確認されているが、この時期にはすでに大溝も放棄されており、水田が大溝構築時まで遡るかどうかについて、解明する資料を得ることはできなかった。「牧」の経営と水田経営が両立するものであったかどうかは不明であり、今後の課題として残った。

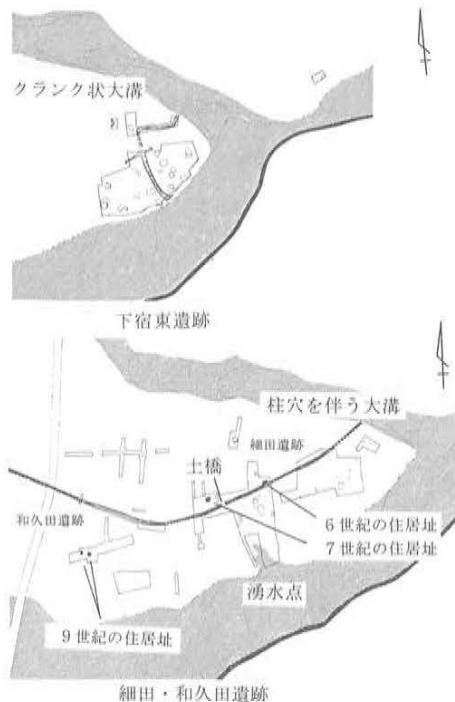
(3) 中野谷の「牧」成立の背景

ところで、古代上野国には9カ所の御牧が存在していたことが『延喜式』に記載されている。また、これ以外にも3ないし4カ所の諸国牧あるいはそれに準じた牧の存在が推定されている（前沢1991）。そして、地名研究の成果により、御牧の所在が推定されているが、地域を推定したに過ぎず、具体的な場所まで、確定されているものはほとんどない。当時、官牧以外にも私牧の存在も確認されており、上野国に数多くの牧が存在していたことも指摘されている（前沢1991）。また、古代利根郡内の牧については、地名と地形から大江正行氏による推定も行われている（大江1988）。

『延喜式』等の記載から8・9世紀における上野国の年間貢上馬は御牧50疋・諸国繫飼45疋であったと推定されている（山口1986）が、この数は全国でも最多であり、当時上野国が全国でも



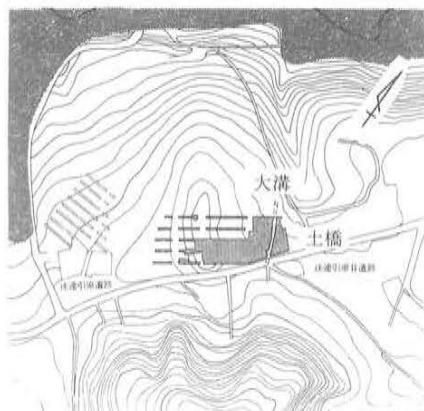
中原遺跡



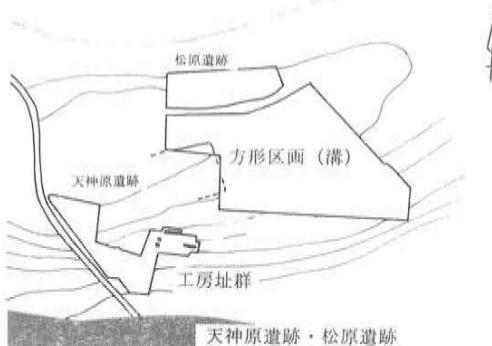
下宿東遺跡



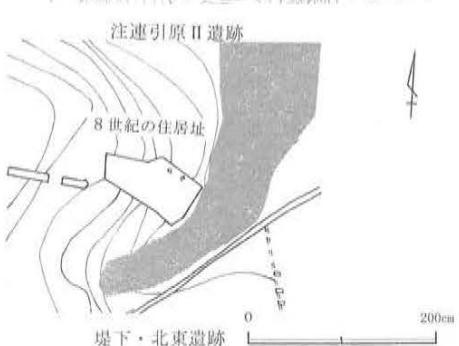
下塙田遺跡



注連引原II遺跡



天神原遺跡・松原遺跡



堤下・北東遺跡

第346図 中野谷地区遺跡群の奈良・平安時代の遺構

有数の馬生産国であったことを示している。

本遺跡は当時の碓氷郡に含まれると推定されるが、碓氷郡には、坂本駅、野後駅の2駅が存在しており、駅馬数は坂本駅15疋・野後駅10疋であり、さらに碓氷郡に伝馬5疋が配置されていたとみられる。したがって、碓氷郡の官馬数は30疋であり、上野国の官馬75疋のうち40%が碓氷郡に属していたことになる。碓氷峠を背景に多数の馬の需要があった地域性が、中野谷に「牧」を設ける要因の一つとも考えられる。

また、物部氏永を賊首とする群盜が899年（寛平元年）に蜂起し、900年（昌泰3年）に追捕されたことが『日本紀略』『扶桑略記』に記されている。物部氏は甘樂・多胡郡をあたりを基盤としていたと推定されている（西垣1989）。物部に関する文字資料は鏑川流域に多く、さらに碓氷郡まで勢力が及んでいた可能性もある。

なお、「餓馬の党」と呼称される馬による運送を生業とした強盗が活動したのもこの時期であり、これを取り締まるため「碓氷坂」に閻を899年（昌泰2年）に設置することが太政官符にあり（『類聚三代格』）、碓氷郡周辺が騒然とした状況にあったことが類推される。

これらの事件が発生した9世紀末～10世紀初頭の時期は、本遺跡群の「牧」が営まれていた時期に該当する。そして、共に馬に関連性のある事件であることから、何らかの関連性や影響が及ぼされた可能性が高い。なお、西毛地域におけるこの時期の社会の中では、物部氏は重要な役割を担っていた可能性が高く、「牧」の経営に関与していた可能性についても、留意しておく必要があろう。

（4）「牧」管理集落の推定

「牧」の直接的遺構が検出された遺跡は不明であるが、「牧」を管理していたと推定される集落の調査事例はいくつか知られている。

山梨県北巨摩郡武川村に存在する宮間田遺跡は9世紀後半～11世紀にかけて継続的に営まれた集落遺跡であり、住居址74軒・掘立柱建物址45棟が検出されている（平野1988）。この遺跡からは「牧口」と書かれた墨書き土器が検出されている。また、遺跡のある武川村一帯は『和名類聚抄』の巨摩郡真衣郷に比定され、『延喜式』に真衣野牧の設置の記載もある地域である。こうした状況から、宮間田遺跡と「牧」の関連性が指摘されている。

また、長野県北佐久郡御代田町の鎧師屋遺跡群（野火付・前田・十二・根岸）は奈良・平安時代の住居址357軒・掘立柱建物址434棟が検出されている。そして、ここでは古墳時代後期～平安時代までの馬19頭分の馬骨が検出されている。御代田町は推定東山道ルート上に存在し、『延喜

式』に記載のある御牧「塩野牧」と「長倉駅」の比定地である。調査担当者の堤隆氏は「塩野牧」あるいは鎌師屋遺跡群を「長倉駅」の経営にあたった人々の集落と推定している（堤1987等）。

これらの遺跡は、「牧」の管理集団の居住する集落と推定されており、掘立柱建物址が多いことや、畿内系の須恵器や土師器が多数出土している点、墨書き土器が多い点などに共通点が認められる。

中野谷地区遺跡群の周辺で、こうした管理集団が居住したと推定される集落遺跡としては、北部の下位段丘面に存在する大王寺地区遺跡群（松井田工業団地遺跡）及び新寺地区遺跡群（西裏・西新井遺跡、諏訪辺遺跡）と、東部の咲々神社周辺の鷺宮地区遺跡群（荒神平・吹上遺跡、桜林遺跡等）がある。いずれの遺跡群も弥生時代以来の伝統集落（能登・洞口・小島1985）である。前者は地名等から『和名類聚抄』にある碓氷郡の郷の一つである「磯部」郷の一部に比定することが可能であるが、後者の集落については、現在のところ比定される郷名はない。

大王寺地区遺跡群・新寺地区遺跡群では9世紀代に住居軒数が倍増しており、集落規模の拡大が確認されている（大工原・金井・和田1991）。また、周辺では田中田・久保田遺跡と松井田工業団地遺跡A区において平安時代の水田址が検出されており、「磯部」郷が農業集落としての側面を有していた可能性が高いことが解る。ただし、田中田・久保田遺跡では馬蹄痕が多数検出されており（大工原他1992）、馬の飼育との関連性否定できない。

このように、管理集団の集落の特定は現状では難しいが、この二つの遺跡群のいずれかであつた可能性が高い。なお、当時の碓氷郡の中には「駅家」郷が存在したと考えられているが（前沢1991）、比定地がはっきりしていない。そして、咲々神社を中心とした鷺宮地区遺跡群は、当時大規模な集落であったにも関わらず、郷名が不明であり、管理集団の集落としての「駅家」郷であつた可能性について、考慮すべきであろう。

（5）まとめ

中野谷地区遺跡群の様相は、以上のことからも「牧」の関連遺構群である可能性が濃厚であるが、これまでの調査では、埋葬馬（ただし時代は下る）の検出以外、馬が飼育されていた直接的な証拠は得られておらず、遺構群から類推される間接的根拠の積み重ねによるものであり、問題点も多く残されている。

なお、遺存状態の良好な榛名山二ツ岳軽石（Hr-FP）降下直前期の白井大宮遺跡においては、6世紀中葉の馬蹄痕の残る畠が検出され、自然科学的方法を多用した多角的分析により、「休閑放牧を伴う輪換農法」であったとしている（能登・麻生1993）。さらに、ここでは休閑中に「焼

き払い」行為が行われ、そのサイクルは10年であったことも推定しており、この時期の畠作と放牧のシステムにまで言及している。しかし、白井大宮遺跡をはじめとするこの地区の遺跡群では、大規模な溝による区画は検出されておらず、遺構からみた限りでは、奈良時代以降の「牧」とは系統的連続性は認められない。6世紀中葉の白井遺跡群の事例と、8～9世紀の中野谷地区遺跡群の事例との間には、実年代で100年以上の隔たりがあり、この間には律令制の導入といった大きな社会変化もある。馬の飼育方法に大きな転換があったのか、発展形態として溝による区画が構築されるようになったのか等々、今後解決しなければならない問題も多いようである。

以上、現状で判明したことについて、整理してみたが、この遺跡群の調査のみでは解明することが不可能な問題も多く、「牧」が成立した社会的・歴史的背景をさらに明らかにすることが重要であると考える。

(大工原 豊)

註

(註1) 「平城宮では馬廐厩舎とおもわれる東西6丈弱、南北40尺というかなり細長い一連の建物跡が発掘されており、そのそばで発見された幅6.5尺、長さ45尺という長大な土壙は、馬洗い場と推定されている。」(山口1990)が、長大な土壙は本遺跡H-1号住居址とした遺構に類似しているものとみられる。

引用・参考文献

- 相京建史 1986 『三後沢遺跡・十二原遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 青木和明 1988 『宮崎遺跡』 長野市教育委員会
- 青森県教育委員会 1976 『泉山遺跡発掘調査報告書』 青森県教育委員会
- 青森県教育委員会 1987 『大石平遺跡Ⅲ』 青森県教育委員会
- 赤星直忠 1974 『神奈川県金子台遺跡』 横須賀考古学会
- 赤山容造 1982 「堅穴住居」『縄文文化の研究』8 雄山閣
- 浅川利一・戸田哲也他 1969 『田端遺跡調査概報』 町田市教育委員会
- 麻生敏隆・大工原豊 1991 「北関東地方の様相」『石器文化研究』3 石器文化研究会
- 麻生優・荒井幹夫他 1978 『打越遺跡』 富士見市教育委員会
- 麻生優 白石浩之 1986 『縄文土器の知識Ⅰ』 東京美術
- 安孫子昭二 1981 「縄文後期の土器・関東地方」『縄文土器大成』3 講談社
- 阿部博志・渋谷正三 1981 「根岸遺跡」『宮城県當匱場整備関連遺跡群詳細分布調査報告書』 宮城県
教育委員会
- 阿部芳郎 1993 「縄文土器の型式の広がりは何を表すか」『新視点 日本の歴史』1 新人物往来社
- 雨宮正樹他 1988 「山梨県高根町青木遺跡調査概報」『山梨県考古学協会』2 山梨県考古学協会
- 荒井幹夫他 1983 『打越遺跡』 富士見市教育委員会
- 新井和之 1986 「文様系統論・関山式土器」『季刊考古学』17 有山閣
- 石井克巳 1987 『押出遺跡発掘調査概報』 子持村教育委員会
- 石毛直道 1971 『住居空間の人類学』 『』 鹿島出版会
- 石坂 茂 1985 「柄鏡形住居址について」『荒砥二之塙遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 茂・藤巻幸男・桜岡正信 1991 「縄文時代後期初頭における加曾利E式系土器の一様相」『群馬県史
研究』34 群馬県史編さん委員会
- 石坂茂他 1988 『勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石戸啓夫 1986 「東国における暗文を有する土師器について」『史友』18 青山学院大学史学会
- 市浦村教育委員会 1982 『五月女窯遺跡』 市浦村教育委員会
- 伊藤晋祐・増田 修他 1978 『千綱谷戸遺跡発掘調査報告』 千綱谷戸遺跡発掘調査会
- 同 1980 『千綱谷戸遺跡発掘調査報告』 桐生市教育委員会
- 同 1991 『千綱谷戸遺跡'91発掘調査概報』 桐生市教育委員会
- 今村啓爾 1988 「土坑性格論」『論争・学説 日本の考古学』2 雄山閣
- 上野佳也他 1983 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』 軽井沢町教育委員会

- 内田憲治 1988「上鶴ヶ谷遺跡」『群馬県史 資料編1』 群馬県
- 大上周三 1989『厚木市山の上遺跡II』 神奈川県教育委員会
- 大江正行 1988「古代利根郡の歴史的背景について」『群馬文化』214
- 大野政雄・佐藤達雄 1968「岐阜県沢遺跡調査予報」『考古学雑誌』53-2
- 大原正義 1981「北信濃山ノ神遺跡出土の土器について」『信濃』33-4
- 岡本郁栄他 1982『奥の城（西峯）遺跡・第二次発掘報告書』 中郷村教育委員会
- 奥山 潤 1954「縄文晚期の組石棺」『考古学雑誌』40-2
- 尾崎喜左雄 1954「横穴式石室編年への一考察」『史学会報』5輯 群馬大学史学会
- 小野和之・谷藤保彦 1986『中畦遺跡・諏訪西遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 柿沼恵介 1990「弥生文化の伝播と展開」『群馬県史 通史編1』 群馬県
- 柿沼啓介・右島和夫 1986『分郷八崎遺跡』 北橘村教育委員会他
- 葛西 励・高橋 潤 1981『堀合I号遺跡』 平賀町教育委員会
- 金井安子 1984 「縄文時代の集落を有する住居址について」『青山考古学通信』4 青山考古学会
- 神谷佳明 1987「暗文土器」『下東西遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 神村 透 1978「石鎌を見て一群と型式からの私考ー」『信濃』30-11
- 櫛原功一 1986『豆生田第三遺跡』 大泉村教育委員会
- 久保田正寿 1977「T-59遺跡（寺改戸遺跡）発掘調査資料」『青梅市の埋蔵遺跡』 青梅市教育委員会
- 同 1986『寺改戸遺跡』 同
- 黒岩文夫・富澤敏弘 1985『中棚遺跡』 昭和村教育委員会
- 黒坂禎二 1989「羽縄文系土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
- 群馬県考古学研究所編 1987『縄文前期の諸様相』 群馬県考古学研究所
- 群馬県史編さん委員会編 1985『群馬県史 資料編4』 群馬県
- 河野達二編 1985『房総の牧』3 房総の牧研究会
- 小葉一夫 1985「縄文前期集落の構造—内陸部と海浜部の集落比較からー」『法政考古学』10
- 同 1991「「住居址型式」論からの視点」『研究論集X』 東京都埋蔵文化センター
- 小杉 康 1987「樋沢遺跡押型文土器群の研究」『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 岡谷市教育委員会
- 後藤和民 1982「縄文集落の概念」『縄文文化の研究』8 雄山閣
- 同 1988「縄文集落論」『論争・学説 日本の考古学』2 雄山閣
- 後藤守一 1933『西秋留の石器時代住居遺跡』
- 小林達雄 1972「縄文世界における土器の廃棄について」『國史學』93
- 同 1980「縄文時代の集落」『國史學』110・111
- 同 1988 a 「縄文時代の居住空間」『國學院大學文学研究科』19輯

- 同 1988 b 「身分と装身具」『古代史復元3 縄文人の道具箱』 講談社
- 同 1988 c 「スペースデザインと円」『古代史復元3 縄文人の道具箱』 同
- 同 1989 「縄文土器の様式と型式・形式」『縄文土器大観』4 小学館
- 小林達雄・柳田敏司他 1965 『米島貝塚』 庄和町教育委員会
- 小林正史 1992 「器種組成からみた縄文土器から弥生土器への変化」『北越考古学』5
- 斎藤幸恵 1987 「押型文系土器文化の石器群とその性格」『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 岡谷市教育委員会
- 坂口 一・三浦京子 1986 「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』24 群馬県史編さん委員会
- 桜岡正信 1989 「群馬県出土の暗文土師器について」『群馬県史研究』30 群馬県史編さん委員会
- 笹森健一 1981 「縄文時代前期の住居と集落（I）」『土曜考古』3 土曜考古学研究会
- 笹森健一 1981 「縄文時代前期の住居と集落（II）」『土曜考古』4 同
- 笹森健一 1982 「縄文時代前期の住居と集落（III）」『土曜考古』5 同
- 佐原 真 1979 『日本の原始美術2 縄文土器II』 講談社
- 山武考古学研究所編 1991 「八城遺跡」『山武考古学研究所年報』7 山武考古学研究所
- 同 1992 「行田II遺跡」『山武考古学研究所年報』8 同
- 島田哲夫 1990 『一津』 大町市教育委員会
- 下条 正他 1987 『深沢遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 庄野靖寿・星間孝次他 1974 『関山貝塚』 埼玉県教育委員会
- 新藤 彰・小宮俊久 1988 「下新井遺跡」『群馬県史 資料編1』 群馬県
- 鈴木克彦 1986 『青森県花巻遺跡』 黒石市教育委員会
- 鈴木公雄 1963 a 「千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて」『史学』31-1～4
- 同 1963b 「書評:杉原莊介,戸沢充則著『神奈川県杉田遺跡及び桂台遺跡の研究』」「あるかいあ」3
- 同 1964 a 「土器型式の認定方法としてのセットの意義」『考古学手帖』21
- 同 1964 b 「姥山II式土器に関する二・三の問題」『史学』37-1
- 同 1970 「石庖丁様石器について」『史学』43-1・2
- 鈴木加津子他 1993 『精進場遺跡』
- 鈴木正博・鈴木加津子 1982 「安行3 b式研究の序」『土曜考古』5
- 同 1983 「安行式遺蹟解題（1）」『土曜考古』7
- 鈴木道之助 1981 『石器の基礎知識』 柏書房
- 鈴木保彦 1980 「関東・中部地方を中心とする配石墓の研究」『神奈川考古』9
- 同 1986 「続・配石墓の研究」『神奈川考古』22
- 鈴木保彦他 1978 『下北原遺跡』 神奈川県教育委員会

- 鈴木優子他 1983『上村・下村A・下村B遺跡発掘調査報告書』 岩手県教育委員会
- 須田 茂 1991「東山道と上野国の駅家」『群馬県史 通史編2』 群馬県史編さん委員会
- 関根孝夫・倉田恵津子 1987『幸田貝塚展』 松戸市文化ホール
- 菌田芳雄 1961「北関東における縄文式晚期の文化（I）」『県立富士国立公園博物館研究報告』5
- 菌田芳雄 1972『千綱谷戸C-E S地点の調査』
- 大工原 豊 1990「縄文時代後・晚期における局部磨製石器の展開と意義」『青山考古』8 青山考古学会
- 大工原 豊 1991『中野谷地区遺跡群発掘調査概報2』 安中市教育委員会
- 同 1992『天神原遺跡－中野谷地区遺跡群発掘調査概報3』 同
- 同 1993『中野谷地区遺跡群発掘調査概報4』 同
- 大工原 豊・若狭 徹他 1988『注連引原II遺跡』 同
- 大工原 豊・千田茂雄 1990『三本木遺跡・落合遺跡』 同
- 大工原 豊・千田茂雄 1990『中野谷地区遺跡群発掘調査概報1』 同
- 大工原 豊・金井京子・和田宏子 1991『新寺地区遺跡群』 同
- 大工原 豊・金井京子 1992『田中田・久保田遺跡』 同
- 大工原 豊・関根慎二・麻生敏隆・中島 誠他 1993『大下原遺跡・吉田原遺跡』 同
- 鷹野光行 1990「安行3c式土器の3分について」『先史考古学研究』3
- 高橋 桂 1982「宮中遺跡」『長野県史 考古資料編 全一巻（二）』 長野県史刊行会
- ダグラス・フレイザー 1984『未開社会の集落』 井上書院
- 谷藤保彦・関根真二 1993『縄文前期終末の諸様相』 縄文セミナーの会
- 塙田 光 1982「縄文時代竪穴住民の研究」『縄文時代の基礎研究』
- 都築恵美子 1990「竪穴住居址の系統について」『東京考古』8
- 堤 隆 1985『野火付遺跡』 御代田町教育委員会
- 同 1987『前田遺跡』 同
- 同 1988『十二遺跡』 同
- 同 1989『根岸遺跡』 同
- 同 1992『城之腰遺跡』 同
- 同 1986「野火付遺跡における平安時代の埋葬馬について」『信濃』38-4
- 奈良泰史 1986「尾咲原遺跡」『都留市史 資料編 地史・考古』 都留市史編纂委員会
- 寺内敏朗他 1988『谷地遺跡』 藤岡市教育委員会
- 戸沢充則 1955「樋沢押型文遺跡」『石器時代』2
- 戸沢充則編 1987『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 岡谷市教育委員会
- 戸沢充則他 1981『新山遺跡』 東久留米市教育委員会

- 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1994『やまかいどう』7 栃木県埋蔵文化財センター
- 富澤敏弘 1989『城山遺跡』 北橘村教育委員会
- 友野良一 1983「中越遺跡」『長野県史 考古資料編 全一巻(三)』 長野県史刊行会
- 中川成夫・岡本勇他 1966『葦生遺跡』 立教大学博物館講座
- 奈良国立文化財研究所編 1985『平城宮発掘調査報告』XII 奈良国立文化財研究所
- 新津 健 1983「金生遺跡発見の中空土偶と2号配石」『研究紀要』1 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 西井幸雄他 1983『前原遺跡』 宮代町教育委員会
- 西垣晴次 1989「嵐馬の党と新皇将門」『図説群馬県の歴史』 河出書房新社
- 能登健・洞口正史・小島敦子 1985「山棲み集落の出現とその背景」『信濃』37-4
- 能登 健・石坂 茂 1988「八木沢清水遺跡」『群馬県史』資料編1 群馬県
- 能登 健・麻生敏隆 1993「軽石直下で検出された馬蹄痕の性格について」『白井大宮遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 橋本博文・加部二生 1984「Ⅶ群馬県」『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会
- 羽鳥政彦他 1993『赤城遺跡』 勢多郡富士見村教育委員会
- 花岡 弘 1993『石神遺跡』 小諸市教育委員会
- 林 謙作 1977 a「縄文期の葬制 第I部 研究史」『考古学雑誌』62-4
- 同 1977 b「縄文期の葬制 第II部 遺体の配列、とくに頭位方向」『考古学雑誌』
- 同 1986「亀ヶ岡と遠賀川」『日本考古学』5 岩波書店
- 原 雅信 1991「群馬県における縄文時代前期における住居形態について」『研究紀要』8 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 樋口昇一他 1982『阿久遺跡』 長野県教育委員会
- 平野 修他 1988『宮間田遺跡』 武川村教育委員会
- 平林 彰・町田勝則他 1993『北村遺跡』 長野県埋蔵文化財センター
- 福田豊彦 1981『平将門の乱』 岩波新書
- 同 1987「変革の世紀—鉄と馬と奴婢」『朝日百科日本の歴史』59 朝日新聞社
- 古郡正志他 1982『小野地区遺跡群発掘調査報告書』 藤岡市教育委員会
- 前沢和之 1991「上野国の馬と牧」『群馬県史 通史編2』 群馬県史編さん委員会
- 前原 豊他 1985『柳久保遺跡群I』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 前原 豊他 1988『柳久保遺跡群V』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 前原 豊・相澤貞順他 1990『芳賀東部団地遺跡III』 前橋市教育委員会
- 増山 仁他 1984『金沢市新保本町チカモリ遺跡』 金沢市教育委員会

- 三沢正善他 1982『乙女不動原北浦遺跡』 小山市教育委員会
- 三友国五郎他 1974『高井東遺跡』 埼玉県教育委員会
- 同 1975『高井東遺跡』本文編 埼玉県教育委員会
- 南 久和 1992「刺枝文」『長野県考古学会誌』第67号
- 三宅敦気 1993「縄文時代後・晩期のムラ ー群馬県月夜野町矢瀬遺跡ー」『東国史論』8
- 宮下健司 1988「縄文土器」『長野県史全一巻（4）』 長野県史刊行会
- 村田文夫 1985「縄文集落」 ニュー・サイエンス社
- 室岡 博 1982『奥の城（西峯）遺跡・第一次発掘報告書』 中郷村教育委員会
- 本橋恵美子 1988「縄文時代における柄鏡形住居址の研究」『信濃』40-8・9
- 百瀬長秀 1984「羽状の沈線文をもつ土器の系統と展開 ー長野県の縄文時代後～晩期土器概観ー」『長野県考古学会誌』49
- 森島 稔・原田政信 1990『円光房遺跡』 戸倉町教育委員会
- 八木光則 1976「いわゆる「特殊磨石」について」『信濃』28-4
- 山口英男 1986「八・九世紀の牧について」『史學雑誌』95-1
- 同 1990「信濃の牧」『長野県史』通史編1 長野県
- 山崎和己他 1984『新堂遺跡』 多摩市教育委員会
- 山田昌久 1990a 「『縄文文化』の構図（上）」『古代文化』9
- 同 1990b 「『縄文文化』の構図（下）」『古代文化』12
- 山田康弘 1993「縄文時代のイヌの役割と飼育形態」『動物考古学』1 動物考古学研究会
- 山梨県考古学協会編 1990『シンポジウム「縄文時代屋外配石の変遷－地域的特色とその画期－」』山梨県考古学協会・山梨学院大学
- 山本輝久 1976「敷石住居出現のもつ意味」『古代文化』28-2・3
- 同 1982「敷石住居」『縄文文化の研究』8 雄山閣
- 若月省吾 1988「阿左美遺跡」『群馬県史 資料編1』 群馬県
- 渡辺 仁 1990『縄文式階層化社会』 六興出版